秀逸本系統『金槐和歌集』の本文について

――柳営亜槐本系統本文との比較および本系統三伝本の本文の吟味――

犬井善壽

〈一〉

『金槐和歌集秀逸』『金槐歌集秀逸』『鎌倉右大臣集秀逸』など、「秀逸」の語を書名に添える『金槐和歌集』の写本や、それと同文を備える『金槐和歌集』の写本が伝わる。管見に入った限りでは、以下の三伝本である。

東海大学付属図書館蔵　桃園文庫本『叫芳亭叢書』所収『鎌倉右大臣集秀逸』一冊　〔本稿略号・秀桃〕

外　題　叫芳亭叢書　鎌倉右大臣集秀逸　賀茂真淵選　（題箋）

巻頭題　鎌倉右大臣集秀逸

序文題　かまくら右大臣集秀逸　「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」（校訂）が載る。

その末尾に「宝暦十年五月心識りの主たちの為に賀茂真淵が記せるなり」（校訂）とある。

巻首題　金槐和歌集秀逸

所載歌　一九七首

合　綴　『県居の拾遺』『綾足家乃集抜粋』

奥書等　ナシ。合綴の『綾足家乃集抜粋』に寛政四年（一七九二）写という「阿岐磨」の書写奥書がある。

西尾市岩瀬文庫蔵　『金槐和歌集』　一冊　〔本稿略号・秀岩〕

外　題　金槐和哥集　完（題簱）

巻　頭　「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」（校訂）が載る。

その末尾に「宝暦十年五月心識りの主たちの為に賀茂真淵が記せるなり」（校訂）とある。

巻首題　金槐和歌集

所載歌　一九八首

奥書等　ナシ

龍谷大学大宮図書館蔵　写字台文庫本　『鎌倉右大臣集』　一冊　〔本稿略号・秀龍〕

外　題　鎌倉右大臣集　（題簱）

巻　頭　「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」（校訂）が載る。

その末尾に「宝暦十年五月心識りの主たちの為に賀茂真淵が記せるなり」（校訂）とある。

巻首題　金槐歌集秀逸

所載歌　一九八首

奥書等　ナシ

所載歌を見るだけで、普通一般の『金槐和歌集』つまり定家所伝本『金槐和歌集』の六六三首や貞享四年版行本『鎌倉右大臣家集』の七一九首などに比べて所載歌数が少なく、いわゆる定家所伝本系統や柳営亜槐本系統などとは異なる別種の本文であることは見当が付く。『金槐和歌集』の中の「秀逸」歌を抜粋した本文なのである。[2]

稿者は、その本文を『金槐和歌集』の一異種本と認め、「秀逸本系統」と呼ぶことにしている。[1]

然るに、これ等の本は従前の『金槐和歌集』の本文研究に於いて注意されておらず、文献目録類でも他の『金槐和歌集』と同列に扱われている。文献目録類を以てしては普通一般の『金槐和歌集』と区別できないのである。

東海大学付属図書館編『桃園文庫目録　中巻』（昭和六三年三月刊）には、秀桃本の少々詳しい解題がある。

金槐和歌集秀逸　写本　一冊　　桃　三〇　一三
賀茂真淵選　袋綴　紙表紙　二三・三×一七糎　十一行　八十八丁　外題左肩「叫芳亭叢書」　「平安山村氏圖書記」印
綾足家集抜粋奥書「右綾太梨集土佐旦童法師おさむる處のもとつ文によみかうかへて寫し侍りぬ　寛政四とせとふ秋文月十まり三の日業を畢　阿岐磨」（「あかたゐの拾遺」「あやたり家の集抜粋」を含む）

賀茂真淵の撰で上田秋成が『県居の歌集』に補撰を加えた『県居の拾遺』や真淵門下の建部綾足の『家乃集』の抜粋との合綴であると明記し、この書が抜粋本文であることを推測できる解題が行なわれているのである。

『岩瀬文庫目録』（昭和十一年九月刊）は、次のように、冊数と配架番号を掲げている。

金槐和歌集　一冊　和　三七―二〇

蔵書目録として適切である。『補訂版　国書総目録　第二巻』（平成元年十一月刊）の「金槐和歌集」の項には、

岩瀬（二部）

と、岩瀬文庫に『金槐和歌集』が二本収蔵されていることは掲げられているが、どのような『金槐和歌集』であるかは示されていない。岩瀬文庫蔵の『金槐和歌集』の一本は「手入本　鎌倉右大臣家集」と題される柳営亜槐本系統真淵評語本系列の写本であるが、いま一本はこの秀逸本系統の本なのである。『私家集伝本書目』（昭和四十年十月刊）の「源実朝」の項は、その岩瀬文庫蔵の『手入本　鎌倉右大臣家集』に関しては、

書入本　鎌倉右大臣家集　一　写　　西尾市立（三・七二・四五）　岩瀬文庫

と掲出しているが、秀逸本系統のこの秀岩本の方は掲出していない。

秀龍本については、『私家集伝本書目』の「源実朝」の項に、

鎌倉右大臣集　一　写　竜谷大（九一一・二四・八・一）

とあり、『補訂版　国書総目録　第八巻』の「補遺」の「金槐和歌集」の項にも、

竜谷（「鎌倉右大臣集」、一冊）

とあるが、共に、特異な『金槐和歌集』であることの言及はない。目録類の如上の扱いは、これ等の『金槐和歌集』を定家所伝本系統や柳営亜槐本系統等の普通一般に見られる『金槐和歌集』とする誤解を生じかねない。

『桃園文庫目録』は解題目録ということもあって書誌的解説も詳しく、この書が『金槐和歌集』の抜粋本であると推定できる記載であるが、その『桃園文庫目録』を含めて、諸目録にはこの書が『金槐和歌集』諸本の中で特異な本文を持つ異種本であることについては明言されていない。従前の秀逸本系統の扱いはこの程度である。

本稿において、この『金槐和歌集秀逸』の紹介の意を併せて、この書の本文について検討し、『金槐和歌集』諸系統、特に柳営亜槐本系統真淵評語書入版行本や真淵評語本系列写本との本文の関係を具体的に示し、併せて、三本相互の本文異同を検討し、各本の本文の書写上の性格を明かにし、以て、この系統の妥当な本文を追及する。

〈二〉

稿者は、『金槐和歌集』の本文流伝に関する検討の一環として、この『金槐和歌集秀逸』の秀岩・秀桃本を含めて抜粋諸系統の所載歌・部類・真淵評語本に付されている合点・歌順について柳営亜槐本系統および定家所伝本系統と比較し、歌番号によって整理した対照表を作成し、[3] また、管見に入った『金槐和歌集』諸伝本の伝本分類私案を提示して、[2] この三伝本の本文は抜粋という著作性本文形成を経たものと認定し、[1]「秀逸本系統」と命名した。いま少し詳しく言うと、この秀逸本系統は、柳営亜槐本系統真淵評語本系列の本文から、歌順・部類・本文を殆ど変えることなく二〇〇首程の歌を抜き出した異種本であり、柳営亜槐本系統真淵評語本系列からの抜粋系と承知した上で、『金槐和歌集』の一系統と把握すべき本文を有している諸本である、と結論付けたのである。

旧稿の確認の意を併せて、以下に、秀逸本系統三本の所載歌について、柳営亜槐本系統・定家所伝本系統と歌番号によって対照し、対照表として提示する。真淵評語本の合点等の詳細については、旧稿をご参照ありたい。[3]

柳営亜槐本系統　初二句(合点)	歌番号	秀　岩	秀　龍	秀　桃	定家本
春　今朝みれば　山も霞て●	1	1	1	1	1
山里に　家ゐはすべし　●	3	2	2	2	7
春はまづ　若菜つまむと　●	6	3	3	3	5
朝霞　たてるを見れば　●	7	27	4	4	3
草ふかき　霞の谷に　◎	14	4	5	5	540
春くれば　まづ咲宿の　●	15	5	6	6	14
若菜つむ　衣手ぬれて　●	17	6	7	7	10
春風は　ふけどふかねど　●	23	7	8	8	18
我宿の　八重のこうばゐ　●	25	8	9	9	36
このねぬる　朝けの風に　●	35	9	10	10	16
我宿の　梅花さけり　●	36	10	11	11	29
水たまる　池のつゝみの　●	42	11	12	12	25
桜花　ちらまくおしと　●	45	12	13	13	63
桜花　ちらばをしけむ　●	46	13	14	14	64
みよしのゝ　山に入けん　●	49	14	15	15	59
木のもとにやどりをすれば●	61	15	16	16	53
山風の　さくらふきまく　◎	76	16	17	17	71
春はきて　雪は消にし　●	84	17	18	18	79
山ふかみ　尋てきつる　●	85	18	19	19	78
さゞ波や　しがの都の　●	90	19	20	20	89
春ふかみ　花散かゝる　●	94	20	21	21	95
誰すみて　誰ながむらん　●	100	21	22	22	34
あおによし　ならの山なる●	105	22	23	23	41
立かへり　見てもわたらん●	109	23	24	24	107
いとはやも　暮ぬる春か　●	111	24	25	25	110
玉もかる　井でのしがらみ●	115	25	26	26	106
玉もかる　井での河風　●	116	26	27	27	105
夏　おしみこし　花の袂も	133	28	28	28	117
春過て　いくかもあらねど●	135	29	29	29	119
五月やみ　おぼつかなきに	145	30	30	30	144
五月やみ　さよふけぬらし	147	31	31	31	*666
足引の　山時鳥	149	32	32	32	125
有明の　月は入ぬる	151	33	33	33	128
さみだれに　夜の更行ば	152	34	34	34	135
五月雨の　雲のかゝれる　●	154	35	35	35	137
郭公　きけどもあかず　●	159	36	36	36	141
うたゝねの　夜の衣に	161	37	37	37	140
秋　きのふこそ夏はくれしか●	180	38	38	38	155
夕されば　衣手涼し　●	182	39	39	39	162
今よりは　涼しくなりぬ　●	188	40	40	40	*671
天の川　みなわさかまき	192	41	41	41	164
彦星の　ゆきあひをまつ　●	194	42	42	42	166
夕されば　秋風涼し	195	43	43	43	167
天の川　きりたちわたる	196	44	44	44	168
七夕の　別をおしみ	198	45	45	45	170

柳営亜槐本系統　初二句(合点)	歌番号	秀　岩	秀　龍	秀　桃	定家本
いまはしもわかれもすらし◎	199	46	46	46	171
秋風に　夜のふけゆけば ●	201	47	47	47	173
踏のべの　をのゝ夕霧 ●	209	48	48	48	178
たそがれに　物思ひをれば●	212	49	49	49	186
夕されば　のぢのかるかや●	214	50	50	50	191
秋風に　なにゝほふらん	216	51	51	51	181
秋風は　あやなく吹そ ●	219	52	52	52	196
うづら鳴　ふりにしさとの●	221	53	53	53	558
久かたの　空とぶ雁の ●	222	54	54	54	229
かりのゐる　門田のいなば●	224	55	55	55	228
鳴わたる　雁の羽風に ●	227	56	56	56	219
天の原　ふりさけみれば ●	229	57	57	57	217
雁鳴て　秋風さむく ●	231	58	58	58	204
秋風に　山とびこゆる	232	59	59	59	224
雁金は　ともまどはせり ●	234	60	60	60	226
雲のゐる　梢はるかに ●	237	61	61	61	237
山田もる　いほにしをれば	246	62	62	62	233
秋ふかき　露さむきよの ●	251	63	63	63	206
野辺みれば　露霜寒み ●	256	64	64	64	257
暮かゝる　夕の空を ●	259	65	65	65	199
秋風は　やゝはだ寒 ●	267	66	66	66	203
月きよみ　秋の夜いたく ●	270	67	67	67	244
天の原　ふりさけみれば ●	271	68	68	68	210
大原や　おぼろのし水	277	69	69	69	563
たまさかに　見る物にもが●	279	70	70	70	213
塩がまの　浦ふく風に ●	282	71	71	71	216
さゞ浪や　ひらの山風 ●	283	72	72	72	243
月見れば　衣手さむし ●	284	73	73	73	241
久堅の　月のひかりし	286	74	74	74	212
夜を寒み　ね覚て聞ば ●	289	75	75	75	247
ぬれておる　袖の月影 ●	292	76	76	76	256
初雁の　羽風のさむく ●	298	77	77	77	262
雁なきて　さむき嵐の ●	299	78	78	78	263
けさきなく　雁金さむみ ●	300	79	79	79	264
雁鳴て　吹風さむみ ●	301	80	80	80	260
雁鳴て　さむきあさけの ●	302	81	81	81	261
はかなくて　暮ぬと思ふを	303	82	82	82	271
長月の　有明の月の	304	83	83	83	272
冬　秋はいぬ風に木の葉は●	312	84	84	84	275
春といひ　夏とすぐして ●	316	85	85	85	568
よしの川　もみぢ葉ながる●	317	86	86	86	284
初時雨　ふりにし日より ●	318	87	87	87	279
難波がた　あしの葉しろく●	326	88	88	88	308
烏羽玉の　いもが黒髪	330	89	89	89	299
音羽山　やまおろしふく ●	335	90	90	90	303

柳営亜槐本系統　初二句(合点)	歌番号	秀　岩	秀　龍	秀　桃	定家本
我門の　いた井のし水　●	338	91	91	91	340
ひらの山　やま風さむき　●	340	92	92	92	305
雲ふかき　み山のあらし　●	347	93	93	93	336
もの丶ふのやなみつくろふ●	348	94	94	94	*677
さ丶の葉の　み山もそよに●	349	95	95	95	335
笹の葉に　霰さやぎて　●	350	115	96	96	*678
夜をさむみ　浦の松風　●	354	96	97	97	294
月清み　さよふけ行ば　●	355	97	98	98	296
風寒み　よの深行ば　●	356	98	99	99	298
難波がた　塩ひにたてる　●	359	99	100	100	315
みさごゐる　磯辺にたてる●	360	100	101	101	317
ゆふされば　塩風寒し　●	364	101	102	102	318
山たかみ　あけはなれ行　○	365	102	103	103	333
久堅の　あま雲あへり　●	368	103	104	104	*679
深山には　白雪ふれり　●	369	104	105	105	323
巻向の　桧原のあらし　●	370	105	106	106	322
をのづからさびしくもあるか	375	106	107	107	329
かもめゐるおきのしらすに●	378	107	108	108	622
冬ごもり　それとも見えず	380	108	109	109	311
降雪を　いかに哀と　●	385	109	110	110	576
うちわすれはかなくてのみ	396	110	111	111	582
足引の　山よりおくに	397	111	112	112	583
武士の　やそうぢ川を　●	400	112	113	113	343
しら雪の　ふるの山なる　●	401	113	114	114	344
うば玉の　このよなあけそ	405	114	115	115	351
恋　をじかふす夏の丶草の●	410	116	116	116	480
我恋は　み山の松に　●	411	117	117	117	431
君にこひ　うらぶれをれば●	421	118	118	118	407
足引の　山の尾上に　◎	425	119	119	119	373
我恋は　百しまめぐり　●	429	120	120	120	507
藻塩やく　あまのたく火の○	437	121	121	121	*687
わが恋は　初山あゐの　○	438	122	122	122	374
足曳の　山にすむてふ　●	439	123	123	123	*688
しらま弓　いそべの山の　○	442	124	124	124	500
あし鴨の　さはぐ入江の　○	443	125	125	125	388
おほあらきのうきたのもり●	455	126	126	126	496
いそのかみふるのたかはし●	456	127	127	127	440
海人衣　たみの丶島に　●	459	128	128	128	428
おく山の　岩がき沼に　●	464	129	129	129	490
年ふとも　音にはたてじ	467	130	130	130	439
しら山に　ふりてつもれる●	469	131	131	131	446
雲のゐる　吉野のたけに　●	479	132	132	132	447
むこのうらの入江のすどり●	484	133	133	／	511
我恋は　夏の丶薄　○	499	134	134	133	414
秋風に　なびく薄の	500	135	135	134	379

柳営亜槐本系統　初二句(合点)	歌番号	秀　岩	秀　龍	秀　桃	定家本
時雨ふる　大あらきの、●	502	136	136	135	385
今更に　なにをか忍ぶ　●	508	137	137	136	415
五月やま　木の下やみの　●	509	138	138	137	401
故郷の　あさぢが露に	513	139	139	138	470
こぬ人を　かならずまつと●	516	140	140	139	453
恨わび　またじとおもふ　◎	520	141	141	140	*697
時鳥　来なく五月の	529	142	142	141	400
秋はぎの　花野の薄	533	143	143	142	381
忍びあまり　恋しき時は　●	539	144	144	143	427
秋の野に　朝ぎりがくれ	541	145	145	144	372
津の国の　こやのまろやの●	545	146	146	145	476
故郷の　杉の板屋の　●	550	147	147	146	475
しのぶ草　忍び――に　●	552	148	148	147	468
秋の田のほのうへにすがく●	561	149	149	148	*700
雑　旅衣　袂かたしき　●	567	150	150	149	514
東路の　さやの中山　●	569	151	151	150	*702
やしのさき　月影さむし　◎	571	152	152	151	*704
世中は　つねにもがもな　●	572	153	153	152	604
旅衣　うらがなしかる　●	575	154	154	153	517
旅衣　すその、露に	576	155	155	154	518
ひとりふす　草の枕の	578	156	156	155	520
独ふす　草の枕の　露の上●	579	157	157	156	521
旅衣　夜半のかたしき　●	584	158	158	157	531
かたしきの　衣手いたく	587	159	159	158	529
箱根路を　わがこえくれば●	593	160	160	159	639
春雨に　うちそぼちつ、　○	594	161	161	160	535
春雨は　いたくなふりそ	595	162	162	161	534
夜を寒み　独ね覚の　●	597	163	163	162	623
都より　ふきこむ風の　●	600	164	164	163	626
岩ねふみ　いくへの峯を	602	165	165	164	625
おく山の　苔の衣に　●	613	166	166	165	650
神風や　あさひの宮の　●	616	167	167	166	659
男山　神にぞぬさを　●	621	168	168	167	354
八幡山　木だかき松に　●	624	169	169	168	314
あふひ草　かづらにかけて●	627	170	170	169	653
さよ深て　いなりの山の　●	629	171	171	170	310
今つくる　三輪のはうりか●	635	172	172	171	652
三くまの、なぎの葉しだり●	637	173	173	172	312
みくまの、　ならのお山に●	639	174	174	173	651
わたつ海のなかにむかひて●	641	175	175	174	642
はしり湯の　神とはむべぞ◎	642	176	176	175	644
伊豆の国　山の南に　◎	643	177	177	176	643
千はやぶる　伊豆のお山の○	644	178	178	177	366
かみつけのせたのあかぎの●	647	179	179	178	647
世中は　かゞみにうつる　●	653	180	180	179	614

柳営亜槐本系統　初二句(合点)	歌番号	秀　岩	秀　龍	秀　桃	定家本
田鶴のゐる　ながらの浜の●	657	181	181	180	*711
君が世は　なをしもつきじ●	658	182	182	181	359
行末も　かぎりはしらず　●	659	183	183	182	357
竹の葉に　ふりおほふ雪の●	664	184	184	183	*714
なよ竹の　ないのもゝそぢ●	665	185	185	184	*715
万代に　見るともあかじ　●	673	186	186	185	367
宮柱　ふとしきたてゝ　●	676	187	187	186	*719
くろきもて　君がつくれる●	677	188	188	187	362
今つくる　黒木のもろや　●	678	189	189	188	*718
山はさけ　海はあせなん　●	680	190	190	189	663
いづくにて世をばつくさむ●	689	191	191	190	600
をのづから　我を尋ぬる　●	693	192	192	191	591
磯の松　幾ひさゝにか　○	694	193	193	192	586
玉くしげ　箱根の海は　●	697	194	194	193	638
うば玉の　やみのくらきに◎	705	195	195	194	621
とにかくにあなさだめなき●	714	196	196	195	620
いとおしや　見るに涙も　●	717	197	197	196	608
時により　すぐれば民の　●	719	198	198	197	619

(注)

1．本対照表は，底本を柳営亜槐本系統の貞享4年版行本とする。「秀逸本系統」が柳営亜槐本系統の貞享版行本系列・真淵評語本系列からの抜粋系であることによる。

「秀逸本系統」3伝本に載る歌のみを対照して掲げ，3伝本の歌番号を底本に対照して示す。

2．「柳営亜槐本系統　初二句」の前に，各部類名を，略称により掲げる。

3．「柳営亜槐本系統　初二句」は，岩波文庫『金槐和歌集』に依り，底本である貞享四年版行本の明かな誤謬は他本により修正して掲げる。

「柳営亜槐本系統　初二句」の踊り字は底本のままとする。複数文字の繰り返し記号は，「――」と表記する。

4．「秀逸本系統」は，岩瀬文庫本（秀岩）・龍谷大学本（秀龍）・桃園文庫本（秀桃）の順に掲げる。

5．「秀逸本系統」の特定の伝本で歌が欠けるばあい，「／」を以ってそれを示し，網掛けを施す。

6．「秀逸本系統」の特定の伝本において貞享4年版行本と歌順が異なるばあい，当該伝本の当該歌の歌番号に網掛けを施し，併せて，その歌の本来的な位置の直前直後の歌の歌番号にも網掛けを施す。

7．参考の為，当該歌の定家所伝本系統における歌番号を最末尾に掲げる。

定家所伝本系統に欠ける歌で群書類従系列の末尾に「一本及印本所載歌」として追加されている歌には「*」印を添えて掲げ，網掛けを施す。なお，定家所伝本系統は柳営亜槐本系統と部類を異にはするが，部類配置相違歌に網掛けを施す。賀・旅両部は柳営亜槐本系統雑部と見る。

8．●を付した歌は，真淵評語本の殆どに合点がある。以下，◎・○印を付した歌は合点を施す伝本が順にが少なくなる。

まず、いま掲げた歌番号の対照表によって、秀逸本系統三伝本の歌の所載状況を見てみる。

所載歌は、秀岩本と秀龍本とは一九八首である。秀桃本は、他の二本でいうと一三三番に当たる、

名所の恋のこゝろをよめる（但、一二六番詞書）

一三三　むこの浦の入江のすどり朝なさな常にみまくのほしき君哉（秀岩本）（濁点稿者。以下同）

を欠き、一九七首である。この一三三番は貞享版行本でいうと四八四番に当たるのであるが、その直後の歌が、

田子のうらの荒磯の玉も波の上にうきてたゆたふ恋もするかな（貞享版行本四八五番）

と初句が類似しており、その混同が原因の一つとなってこの歌を欠くことになった可能性もある。但し、それはこの秀桃本においてこの抜粋が柳営亜槐本系統から行われた場合に限られるわけで、この欠脱の原因は判らない。旧稿でも指摘したとおり、[3] その一九八首は真淵評語本で合点の付された歌が多いが、合点のある歌と限らない。

伝本間で所載歌と歌順に小異はあるが、秀逸本系統三本の歌順は、全体として柳営亜槐本系統貞享版行本系列と全く同一である。三本揃って歌順が逆行したり位置を異にすることは全くない。一方、定家所伝本系統との歌順の相違は甚だ大きい。秀逸本系統は柳営亜槐本系統本文から歌を抜粋したものであることは間違いない。稿者が、先に、他の抜粋系諸系統とともに、「『秀逸』『佳調抜』『抜粋』『抄出』は、貞享四年版行本の歌順のまま歌を抜粋している。配列は基本的には柳営亜槐本系統と同一である」[3] と報告したとおりである。

歌順は、秀岩本に二首、他二本と異なる歌がある。一首は秀龍・秀桃両本が四番とする歌で、秀岩本では、

二七　朝霞たてるをみればみよしの、〳〵、宮に春はきにけり

と二七番として載る。二七番が春部の最末尾であることを見ると、秀岩本の書写者は、春部の書写を了えた直後に、もしくは全巻の書写終了後に、所載歌の確認を行ない、四番歌を脱したことを知り、それを、本来の四番の位置ではなくて春部の最末尾に写したのである。全く同様のことが、秀岩本のみ位置を異にする冬部一一五番に

ついても言える。書写者は、九六番として写すべき、貞享版行本でいうと三五〇番に当たる、

さゝのはに霰さやぎて太山べは峯のこがらししきりて吹ぬ（秀岩本一一五番）

を脱し、冬部を、もしくは全巻を、書写の後に、歌数を数えて歌の誤脱を知り、ここでもやはり冬部の最末尾にこの歌を写したのである。その結果、この歌は、九六番ではなく一一五番に位置することになったのである。

因みに、秀岩本二七番は「故郷立春」の題の歌で、普通の配置ならば春部の末尾に配される歌ではない。また、一一五番は霰の歌で、冬部の末尾「歳暮」の後方ではなくて秀岩本でいえば以下のように九四・九五番に続いて載ることで妥当な位置を占めることになる。かつ、この配列であってこそ真淵評語本等と同順になるのである。

霰

九四　武士のやなみつくろふこての上に霰たばしる那須のしの原

九五　さゝのはの太山もさやに霰ふり寒き霜よをひとりかもねん

この場合、この秀岩本の抜粋が柳営亜槐本から直接行われ、所拠本に付された合点等を見逃した結果、歌の脱落が生じ、点検した上で補った、という可能性もあり、また、この本の所拠本は既に抜粋済みの写本で、歌数が少ないこともあって各部の歌数の確認は容易であった、ということもあり得る。いずれであるかは判然としない。

要するに、秀岩本に見られる二首の独自配置は、転写時の誤脱歌をその部類の末尾に補ったために生じたのであり、秀龍本・秀桃本の歌順が妥当である。秀岩本には歌の不適切な配置移動があるわけであるが、書写を了えた直後に歌数を確認して誤脱歌を補訂するという、慎重な書写態度をとる本でもあることは、注目されてよい。

総歌数の点では、秀龍本と秀岩本の一九八首が妥当である。歌順の点では、秀龍本が、そして一首の誤脱があるとはいえ秀桃本が、妥当である。従って、この二件を併せると、所載歌の点では、秀龍本が、他の二伝本に比して、この秀逸本系統として本来的である、ということになるのである。

〈三〉

秀逸本系統三伝本の本文について、まず、定家所伝本系統等の他系統の本文と比較し、柳営亜槐本系統の内の真淵評語書入版行本もしくは真淵評語本系列写本の本文から抜粋が行なわれていることを明らかにする。

『金槐和歌集』には定家所伝本系統と柳営亜槐本系統という部立・配列・詞書と歌本文・総歌数などの点で大幅な差異のある本文が伝わっていることは周知の事柄である。この秀逸本系統は、前述の通り、所載歌・部立・配列の三点については概ね柳営亜槐本系統と同じである。従って、定家所伝本系統と柳営亜槐本系統とが同部類配置でしかも同文である秀逸本系統所載歌は、その二系統と同文である。かような例は極めて多い。例えば、

秀岩　　正月一日よめる
秀龍
秀桃
秀岩　一　今朝見れば山も霞・て久かたの天の原より春は来にけり
秀龍　一　・
秀桃　一　けさ　　み

と、秀逸本系統一番歌は秀桃本に表記に差異があるのみであり、定家所伝本系統や柳営亜槐本系統の本文とも、

定家　　正月一日よめる
柳営
定家　一　けさ見れば山もかすみてひさかたのあまのはらよりはるはきにけり
柳営　一　今朝み　霞・・　久・方・　原・　春・　来

と、表記の差があるのみで、全く同文である。管見に入った『金槐和歌集』の四十余本の伝本の中で、詞書を春曙文庫本が「正月一日によめる」、架蔵真淵評語本写本が「正月一日をよめる」、歌の末句を狩野文庫本と架蔵真

淵評語本写本が「春はきにける」とするが、他には本文に異文はない。いま一例、対校例のみを掲げておく。

定家　秋のはじめによめる
柳営
秀岩
秀龍
秀桃

定家一六四　あまのがはみなはさかまきゆく水のはやくもあきのたちにけるかな
柳営一九二　天・川・わ　秋・　哉・
秀岩　四一　天・・河・わ　行・　秋・　哉・
秀龍　四一　天・・河・わ　行・　秋・立・　哉・
秀桃　四一　川・　巻・　秋・立・　哉・

表記に小異が見られるのみである。柳営亜槐本系統他本を見ても、第二句に、静嘉堂文庫本「みなとさかまき」、中川文庫本「みなはせかまき」、神宮文庫本「みなはせるまき」（「さか」ト見セ消チ訂正ス）、彰考館文庫本「みなれさかまき」（「わ」ト注記ス）と、小異があるのみである。定家所伝本系統と柳営亜槐本系統の間で本文変化が生じておらず、秀逸本系統にそのまま受け継がれた歌であるから、異文が見られないのである。かような例は極めて多い。なお、一番歌でも同じことが指摘できるが、秀岩本と秀龍本は表記まで合致することが多い。

定家所伝本系統と柳営亜槐本系統との間で、詞書・和歌とも、本文に対立する異文のある歌も、前述の通り、多いのであるが、そのような歌の場合、秀逸本系統は、多くは柳営亜槐本系統の本文と合致する。例えば、

定家　野邊・露
柳営　・
秀岩　辺の
秀龍　辺の

秀桃　　辺の
定家二二九　ひさかたのあまとぶかりのなみだかもおほあらきのゝさゝがうへのつゆ
柳営二二二　久・　空・　鴈・　野の　の上・　露・
秀岩　五四　久・　そら飛・厂・　泪・・　の上・　露・
秀龍　五四　久・　そら飛・厂・　涙・・　の上・　露・
秀桃　五四　久・　そら　厂・　涙・・　野の　の上・　露・

は、定家所伝本系統第二句「天飛ぶ雁の」（校訂）が柳営亜槐本系統で「空飛ぶ雁の」（校訂）へ、第五句「篠が上の露」（校訂）が「篠の上の露」（校訂）へ、本文変化が生じ、柳営亜槐本系統本文となり、それがそのまま秀逸本系統に継承されたのである。いま一例、同様の本文流伝の例を掲げておく。

定家　　まとゆみのふりうに大井がはをつくりてまつにふぢ・かゝる・所・
柳営　　弓・・　川・　松・　藤・のかゝれる　を
秀岩　　弓・・　川・　松・　藤・のかゝれる　・
秀龍　　弓・・　川・　松・　藤・のかゝれる　・
秀桃（朱補入）　弓・・　川・　松・　藤・のかゝれる　を
定家一〇七　たちかへりみてをわたらむ大井がはかはべのまつにかゝるふぢなみ
柳営一〇九　立・　見　も　ん　川・　松・　藤・
秀岩　二三　立・帰・　も　川・　松・　藤・浪・
秀龍　二四　立・帰・　も　川・　松・　藤・浪・
秀桃　二四　立・　見　も渡・　ん　河・　辺　じ

詞書のみがこの型のもの、歌本文のみがこの型のものを併せ、この型の本文流伝が圧倒的に多いのである。

以上のように見ると、秀逸本系統が柳営亜槐本系統本文から歌を抜粋したことは間違いない。ただ、その柳営亜槐本系統諸本は、書写性本文変化[1]によって、幾種かの系列に分れる。特に祐徳稲荷神社寄託中川文庫本・伊達

文庫（二四八・一三）本・神宮文庫本・彰考館文庫（巳六・〇六九・五七）本・高松宮旧蔵本・青山文庫本・書陵部本・内閣文庫（二〇一・四五五）本の中川文庫本系列八伝本と貞享四年版行本・真淵評語書入版行本・貞享版行本系列写本・真淵評語本系列写本等の版行本の類との間の本文の差異はかなり大きい。そこで、秀逸本系統は少なくとも柳営亜槐本系統の中川文庫本系列とは本文を異にする、ということを以下に明かにしておく。

定家所伝本系統と柳営亜槐本系統とで本文が異なることが多い中で、柳営亜槐本系統中川文庫本系列は細部を見ると定家所伝本系統の本文と合致することがままある。そのような歌で秀逸本系統に抜粋されている歌は、中川文庫本系列以外の柳営亜槐本系統系本文、つまり貞享四年版行本の類の本文と合致するのである。例えば、

定家　（はるのはじめにゆきのふるをよめる　四番詞書）
柳営　（春・　・・・・・・・・・・・・・　五番詞書）
中川　（春・　雪・　見て・　五番詞書）
秀岩　（春・　初・・のうた・・・・・・・　二番詞書）
秀龍　（春・　初・・のうた・・・・・・・　二番詞書）
秀桃　（春・　初・・のうた・・・・・・・　二番詞書）

定家　五　春たゝばわかなつまむとしめをきしのべとも見えずゆきのふれゝば
柳営　六　はまづ若・菜　野邊　雪・
中川　六　ん　置・　み　雪・
秀岩　三　はまづ若・菜　お　野　み　雪・
秀龍　三　はまづ若・菜　ん　お　野　み　雪・
秀桃　三　は先・　菜摘・ん　置・　野　雪・

は、柳営亜槐本系統の内の中川文庫本系列八本が全て初句を定家所伝本系統と同じく「春立たば」（校訂）とし、他の柳営亜槐本系統諸本と秀逸本系統は「春は先づ」（校訂）とするのである。詞書も定家所伝本系統に近い。

このように、定家所伝本系統と柳営亜槐本系統中川文庫本系列は同文で（詞書に小異はあるが）、柳営亜槐本系統はそれと対立する異文があり、秀逸本系統は、詞書は定家所伝本系統とも柳営亜槐本系統とも小異があるが、

和歌本文は定家所伝本系統本文と柳営亜槐本系統本文（中川文庫本系列を除く）と合致するのである。かような例が、他にも散見する。従って、秀逸本系統は柳営亜槐本系統の中川文庫本系列本文の影響下にはなく、貞享四年版行本の類の本文と同一である、と判断してよいのである。

定家所伝本系統と柳営亜槐本系統との間には本文の相違がなく、秀逸本系統にのみ異文の見られる歌がある。

定家　（ゆみあそびをせしによしの山のかたをつくりて山人のはなみたる所をよめる　但五八番詞書）
柳営　（　・遊・　・芳・野　・花・見　但四八番詞書）
秀岩　・遊・　・芳・野　・花・
秀龍　・遊・　・吉・野　・花・

秀桃　弓・遊・　・・せ（行間補入）野　作・・　花・　處
定家　五九　みよしの、山にいりけむやま人となり・みてしがなはなにあくやと
柳営　四九　入・　ん山・　・見
秀岩　一四　入・　山・　てみ・　哉・花・
秀龍　一五　入・　ん山・　てみ・　かな花・
（「に」ヲ訂正）
秀桃　一五　野　入・　ん山・　てみ・　哉・花・

「山人となりみてしがな」即ち柚人・仙人と成って見たいものだという定家所伝本系統・柳営亜槐本系統の本文が、秀逸本系統では、「山人と成りてみしかな」と、別解誤解の生じかねない字句に変わっているのである。尤も、この歌、詞書は定家所伝本系統と柳営亜槐本系統で違いがあり、秀逸本系統は柳営亜槐本系統と同文である。

定家　更衣をよめる
柳営
秀岩

秀龍
秀桃
定家一一七　おしみこし花のたもともぬぎかへつ人・の心ぞなつにはありける
柳営一三三　袂・・　・　有・
秀岩　二八　を　袂・・・　・　も　有・
秀龍　二八　を　袂・・・　・　も夏・　有・
秀桃　二八　袂・・　ひと　も夏・

定家所伝本系統と柳営亜槐本系統とは「人の心ぞ夏にはありける」（校訂）と係り結びが整っているが、秀逸本系統のみ「人の心も」と、「も」が重出する。歌意は変りがないが、強調する歌から連体形止めで断定を避けた歌に秀逸本系統では変化しているのである。この本文変化が意改であるのか誤写であるのかは判然としない。

定家　羇中鹿
柳営
秀岩
秀龍
秀桃
定家五一八　たびごろもすその、つゆにうらぶれてひもゆふかぜにしかぞなくなる
柳営五七六　旅・衣・・　露・　うらがれ　夕・風・　鹿・　鳴・
秀岩一五四　旅・衣・・裾・　露・　夕・暮・　鹿・　鳴・
　暮・（朱）
秀龍一五四　旅・衣・・裾・野の露・　夕・露・　鹿・　鳴・
秀桃一五三　衣・・　露・　ゆふ暮・　鳴・成・

定家所伝本系統も柳営亜槐本系統も第四句を「ひもゆふ風に」（校訂）とするが、秀逸本系統のみ「ひもゆふ暮に」（校訂。秀龍本は「夕露」と誤り「露」を朱で「暮」と訂正している）とする。ここは、「衣」「裾」「裏」「紐」「結ふ」の縁語として、「風」でなければならず、秀逸本系統の本文は誤っているのである——なお、第三句を

柳営亜槐本系統の多くの本は「うらがれて」とするが、秋月郷土館本・大阪市立大学森文庫本・中川文庫本・高松宮旧蔵本・書陵部本・内閣文庫本は「うらぶれて」とし、真淵評語書入本写本である菅文庫本・岩瀬文庫本・成田山仏教図書館本・東京大学文久三年本・平沼文庫本・南葵文庫本・藤蘆文庫本・筑波大学本・初雁文庫本・玉里文庫本などは「うらぶれて」を異文注記あるいは勘物とする。秀逸本系統が定家所伝本系統と同じく「うらぶれて」とするのは、さような本文あるいは行間注記に依るためであると見てよい——。

以上のように、その数と量は多くはないが、秀逸本系統のみ本文を異にすることがあるのである。その独自本文は、意改もあれば誤謬もある。秀逸本系統の本文は、さような書写性本文変化が生じている本文なのである

〈四〉

秀逸本系統の三伝本、即ち、岩瀬文庫蔵の秀岩本、龍谷大学蔵の秀龍本、東海大学蔵桃園文庫本の秀桃本のこの系統としての本文を吟味し、それぞれの伝本の本文の性格と位置を追及してみたい。

まず、秀岩本。この本は、独自の異文が極めて少ない。その数少ない例の一、二を検討してみる。

定家		秋・をゝしむといふことを
柳営		惜秋・・・・・
秀岩		惜秋・・・・・
秀龍		惜秋・・・・・
秀桃		あき　お
定家二七二	なが月のありあけの月のつきずのみくるあきごとにおしきけふかな	
柳営三〇四	長・　有・明・	秋・
秀岩　八三	長・　有・明・・	秋・　哉・

秀龍　八三　長・　有・明・　秋・　を
秀桃　八三　長・　明・　秋・　哉・

他本が第二句を「有明の月の」（校訂）とするところを、秀岩本のみ「有明月の」と七音に整えている。故意の省略か誤脱の結果としての音数の整備かは判らない。尤も、「有明の月の」も許容される範囲の字余りであるが。

定家　氷をよめる
柳営　（冬・歌・・）（三三二番詞書）
秀岩　冬・歌・・
秀龍　冬・歌・・
秀桃　冬のうた・
定家三〇三　をとはやま山・おろしふきてあふさかのせきのをがはゝこほりわたれり
柳営三三五　音羽・山・やま　ふく・　坂・　関・　小川・は　しにけり
秀岩　九〇　音羽・山・〳〵　吹・　坂・　関・　小川・は氷・・　しにけり
秀龍　九〇　音羽・山・やま　吹・・　坂・　関・　小川・　氷・・しにけり
秀桃　九〇　音羽・山・やま　ふく・相・坂・　小川・は　しにけり

秀岩本のみ、第二句が、「山おろし吹きて」（校訂）と、他二本と異なり、定家所伝本系統と同じ本文である。尤も、柳営亜槐本系統の中にも、真淵評語本系列の大阪市立大学森文庫本と中川文庫本系列の高松宮旧蔵本・書陵部本・内閣文庫本等「吹きて」（校訂）とする本があり、真淵評語本系列の菅文庫本・岩瀬文庫本・東京大学文久三年本は「きてィ」と異文注記がある。この歌は、末句の異同から見て、前節で見たのと同じ、定家所伝本系統本文が本文変化して柳営亜槐本系統の本文となり、秀逸本系統はその柳営亜槐本系統の本文を継承しているという型であるわけであるが、この「吹て」の個所のみ秀岩本は定家所伝本系統と同じ本文になっているのである。それが偶然の一致であるのか、定家所伝本系統等の本文を知って故意に本文を変えたのか、秀岩本が誤って「て」を添えた結果偶然に定家所伝本系統と同文になったのか、その辺りの事情は判らない。

秀逸本系統における秀岩本の独自異文は、以上の程度に過ぎないのである。基本的には、秀岩本は、柳営亜槐

本系統貞享版行本の系列の本文と合致するということになる。

次に秀龍本。まず、この本に見られる三個所の本文の空白を検討する。秀逸本系統他伝本にはこの空白はない。

秀岩　白・露　本ノマヽ、
秀龍　□□□　□□□□　（詞書ノ行一行分空白）
秀桃　しら　本ノマヽ、

秀龍　四〇　今よりは涼しく也ぬ蜩の啼山陰にあきの夕かぜ　（他二伝本ノ歌本文、省略。異文後掲）

この歌は定家所伝本系統には載らず、群書類従本系列で「一本及印本所載歌」に追加されて「詞書闕」と指摘されている。貞享本等柳営亜槐本系統では「白露」の詞書（一八七番）の歌に続く歌になっている。中で、菅文庫本は朱で、南葵文庫本は藍で、それぞれ「詞書闕」と注記し、平沼文庫本は朱で「古ナシ」と某古写本に「白露」の詞書が欠けることを注記している。貞享版行本等柳営亜槐本系統の本文のままでは「白露」という詞書と「今よりは涼しく成りぬ」（校訂）の歌の内容とが合致しないことに因る注記である。秀逸本系統においては、それを、秀岩本と秀桃本は「白露」という詞書について「本ノマヽ」と注意を喚起する注記を行ない、秀龍本は詞書の為の一行を空白とすることで注意を喚起した、ということになる。

秀岩　（羇中鹿）（一五五番詞書）
秀龍　（　　）（一五五番詞書）
秀桃　（　　）（一五四番詞書）

秀岩一五六　独　臥（行間書入）
ひとりふす草の枕・・の夜・の露は友なき鹿・の涙・・なりけり
秀龍一五六　□□□□□　・　・　・　なみだ也・
秀桃一五五　　卿　まくら　よる　しか　・・也・

この歌の初句は『金槐和歌集』諸本全て「独り臥す」（校訂）である。秀龍本がこの初句を欠く原因は判らない。

秀岩本が「独臥」と行間に書き入れているところを見ると、或る伝本の段階で解読し難い書体で書かれていたものを、秀龍本は空白とし、秀岩本は取り敢えず「ひとりふす」と写して試案を行間に書き入れたのかもしれない。

秀岩　（寄竹祝）（一八四番詞書）
秀龍　（　　）（一八四番詞書）
秀桃　（　　）（一八三番詞書）
秀岩一八五　なよ竹のな、のも、そぢおひぬれどやそのちぶしは色もかはらず
秀龍一八五　□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□
秀桃一八四　なら　　老・　　やそちのふし

秀龍本のみ、第二句以下を空白としている。その原因は判然としない。

三個所の空白のうち二個所の原因は不明であるが、この秀龍本における空白の存在は、この本が転写本であって、柳営亜槐本系統本文から直接抜粋しつつ筆写したその本ではないことを示している。他の二本が秀龍本のごとき空白本文をわざわざ柳営亜槐本系統や定家所伝本系統に依って補って写したとは考えられないからである。

この秀龍本も、独自異文は少ない。その少ない独自異文を検討しておく。

先に詞書が空白となっていると指摘した、

秀岩　四〇　今よりは凉・しくなりぬ蜩・・・の鳴山陰の秋・の夕風・
秀龍　四〇　　・　也・　・・・　啼　にあき　かぜ
秀桃　四〇　すゞ　　うつせみ　　・　初風・

の第四句「鳴く山陰に」（校訂）は、秀逸本系統三本の内では独自異文である。但し、柳営亜槐本系統諸本を見ると、例えば貞享版行本も「なく山かげに」とするわけで、秀龍本の本文はそのような柳営亜槐本系統諸本の本文の継承であって、秀岩本や秀桃本の方が定家所伝本系統の「鳴く山陰の」（校訂）に依って本文を改めた、という可能性もある。なお、秀桃本の第三句「うつせみの」と末句「初風」については、後述する。

秀岩　　野刈萱
秀龍
秀桃
秀岩　五〇　夕されば野路の刈萱うちなびき乱れてのみぞ露も置・ける
秀龍　五〇　　ぞ・　露けかり
秀桃　五〇　去・　打・

秀龍本の末句「露ぞ置ける」は、第四句の「乱れてのみぞ」と「ぞ」が重複し、この本における誤謬である。柳営亜槐本系統他伝本の「露も」が妥当である。なお、秀桃本の末句「露けかりける」は大幅な意改と認められる。

秀岩　（名所の恋のこゝろをよめる）（一二六番詞書）
秀龍　（　　）（一二六番詞書）
秀桃　（　心・　）（一二六番詞書）
秀岩一三一　しら山に降りて積れる雪なれば下こそ消・れうへはつれなし
秀龍一三一　　社・きえれ
秀桃一三一　・上・

第四句は、秀逸本系統他本も他系統諸本も「下こそ消ゆれ」（校訂）と読める、妥当な本文である。それを、秀龍本のみ「下社（こそ）きえれ」とする。「消」の漢字表記を訓み誤ったものであろう。あるいは、貞享版行本その他の本に見られる異文注記のごとき「きえねィ」の「ね」を「れ」と読み誤った本文を受け継いだのである。因みに、秀龍本の「れ」の字母は「連」であり、如上の誤写は生じ得ないが。所拠本の表記が同じく「れ」であったのなら、この異文は更に先行する書写本において生じていたものと考える必要があるわけで、そうなると、秀龍本は真淵評語本系列柳営亜槐本系統本を直接抜粋した本ではないということになる。

秀岩　　寄竹祝
秀龍
秀桃

秀岩一八四　竹の葉にふりおほふ雪のうれをおもみしたにもちよの色はかくれず
秀龍一八四　　かはら
秀桃一八三　　は　降・覆・　上・

「寄竹祝」という祝いの歌であるから、秀龍本のごとく、三友の一つである竹の葉の「色は変らず」（校訂）という本文であって不適切ではない。因みに、定家所伝本系統の群書類従本系列も「色は変らず」（校訂）とし、柳営亜槐本系統の初雁文庫本は「かくれず」の右行間に「はらィ」と注記している。秀龍本はそれらの本文と合致するのである。甲南女子大学本が「いろはかへれす」とするのは「かく」「かへ」の連綿の誤写、東京大学文久本が「かくさす」とするのも誤謬で、右行間に朱で「れ」と書入れているのは訂正である。以上は秀龍本の本文とは直接関連がない。他伝本や他系統の「千代の色は隠れず」（校訂）は、降って覆った雪の重みで竹の末葉が垂れ下がり、その雪の下の緑の竹の葉が隠れないでちらと見える、というわけで、祝いの歌として、適切である。秀龍本は、柳営亜槐本系統や定家所伝本系統の本文を、趣旨を変えずに字句を改めて表出したのである。

秀龍本は、所拠本の本文から三個所空白を残し、また、少々の本文変化を生じた本文を有している。空白部分に適切な本文を補うことで、この秀逸本系統のかなり信頼できる本文の復元が可能な伝本であると言える。

以上の秀岩本と秀龍本とで共通異文を持つ歌がある。定家所伝本系統不載歌で、類従本の追加歌であるのだが、

類従　　雪
柳営　　（　）（三六〇番詞書）
秀岩　　（　）（一〇〇番詞書）
秀龍　　（　）（一〇一番詞書）
秀桃　　（　）（一〇一番詞書）
類従六七九　久かたのあま雲あへり葛・・城や高・まの山はみ雪・ふるらし
柳営三六八　　堅・　　かづら本　・　　・

秀岩一〇三　堅・　・・　高・圓の山　ゆき降・
秀龍一〇四　堅・　・・　高・圓の山　ゆき降・
秀桃一〇四　かづら木　・　・

秀岩本と秀龍本のみ第三・四句を「葛城や高円の山は」とし、字余りになるが、他二本や柳営亜槐本系統・定家所伝本系統群書類従本系列は「葛城や高間の山は」（校訂）とする。古来「葛城や」を冠して歌に詠まれるのは高間山であって高円山ではない。秀桃本は柳営亜槐本系統本文を継承しているが、秀岩本と秀龍本とは本文変化が生じているわけである。「高間の山は」「高円山は」という七音内の「まの」と「まと」のみの本文変化ではないところを見ると、書写上の誤写というよりも、書写者の誤解による誤謬という本文変化であると考えられる。

類従　（寄月待人）（六九六番詞書）
柳営　（　　）（五一九番詞書）
秀岩
秀龍
秀桃
類従六九七　恨わびまたじと思・ふ夕・べだになを山のはに月は出にけり
柳営五二〇　おも　ゆふ
秀岩一四一　・　・　で
秀龍一四一　・　・　で
秀桃一四〇　待・　・　猶・　・端

末句を秀岩本と秀龍本のみ「月はでにけり」とする。類従本諸本等は「月は出にけり」と表記する。「月はイデにけり」と訓むべきところであろう。柳営亜槐本系統の中川文庫本や高松宮旧蔵本は「いてにけり」とし、系統は異なるが、秀逸本系統同様に柳営亜槐本系統真淵評語本から歌を抜粋した抄出本系統（学習院図書館蔵）も「いてにけり」とする。尤も、柳営亜槐本系統諸本のみを見ても、「月はてにけり」と表記する本と「月は出にけり」と表記する本との双方があるのだが。いずれにせよ、秀岩本と秀龍本とは「でにけり」と異文になっているので

ある。この秀岩・秀龍本の同文が、偶然の一致であるのか、書承的に関連があるのかと言えば、やはり、柳営亜槐本系統からの本文変化で、両本は秀桃本に対立する近い関係にある、という見方をしてよいと考える。

先の例にこの二例を合せても、秀龍本および秀岩本の本文は誤謬が少ないのである。

最後に、秀桃本。この本は、秀逸本系統という範囲内に止まらず、ことを『金槐和歌集』諸本に広げても、独自の異文が多い。その内の幾つかについて例示・検討し、この本の書写上の性格を確認したい。

花間鶯

秀岩　秀龍　秀桃　五　春くればまづ咲宿の梅・の花かをなつかしみ鶯ぞ鳴
秀龍　六　・香
秀桃　六　うめ　香　と｜　啼

第四句を他系統諸本を含め秀岩本も秀龍本も「香を懐かしみ」（校訂）と鶯が鳴く理由を歌う句とするが、秀桃本のみ、「香をなつかしと」と、理由を併せた引用とする。意改でないとすれば、彰考館文庫蔵小田本が「香をなつかしミ」と表記するような、片仮名の「ミ」を「と」と誤ったのである。因みに、柳営亜槐本系統真淵評語本系列の静嘉堂文庫本も「香をなつかしと」と秀桃本と同文である。偶然同じ本文変化が生じたのであろう。

秀岩　（花をよめる）（一二番詞書）
秀龍　（　　）（一三番詞書）
秀桃　（　　）（一三番詞書）
秀岩　一三　桜・・花ちらば惜・けん玉鉾の道行ぶりに折てかざゝむ
秀龍　一四　・・　・
秀桃　一四　さくら　散・　おしか　ちり　ん

秀桃本のごとく「散らば散りけむ」（校訂）という本文は、他系統諸本にも見られない。これでは末句の「折りてかざさむ」（校訂）と齟齬する。「おしか」という勘物の本文、つまり他二本や他系統の本文が妥当である。

秀岩　落花をよめる
秀龍
秀桃
秀岩　二〇　春ふかみ花散かゝる山の井のふるき清水に蛙鳴・也
秀龍　二一
秀桃　二一　ふかき　なく

秀桃本のみ第四句「山の井の深き清水」（校訂）とする。初句の「ふかみ」と字句が重なる。他は「古き清水」（校訂）である。この歌枕「山の井」は『万葉集』において安積山と併せて詠まれた「安積の山の井」であり、

古今集[4]　あさか山かげさへ見ゆる山の井のあさくは人をおもふものかは（仮名序・采女。万葉三八〇七）
古今集　山の井の浅き心もおもはぬに影ばかりのみ人の見ゆらむ　（七六四・詠人知らず）
玉葉集　山の井のあさき心をしりぬればかげみんことはおもひたえにき（一四九四・待賢門院堀川）

等、「浅く」「浅き」と詠むのが本意で、秀桃本の「ふかき清水」は歌の字句表現の伝統に反している。これは、「る」が「可」を字母とする「か」と類似して誤られたものと見てよい。因みに、定家所伝本系統群書類従本系列は「ふりにし水に」とする。なお、柳営亜槐本系統中川文庫本系列の伊達文庫本も「ふかき」とし、真淵評語本系列の大阪市立大学森文庫本は「ふかきィ」と異文注記する。秀桃本のみに生じた誤謬ではないわけである。

秀岩　（歎冬をよめる）（二五番詞書）
秀龍　（　　）（二六番詞書）
秀桃　（　　）（二六番詞書）
秀岩　二六　玉もかる井手の川風吹・にけりみなわにうかぶ山・吹・の花
秀龍　二七

秀桃　二七　刈・　吹・渡・す　は　まよふやまぶき

秀桃本の本文であっても、井手の川風が吹き渡す水泡に浮ぶ山吹の花であるよ、と歌意は通るが、川風が吹いたようだ、水泡の上に浮んでいる山吹の花でそれと判る、とする他伝本・他系統の本文が妥当である。因みに、第三句を「吹き渡す」（校訂）とする本は他系統にはない。第四句は、「みなわにうきぬ」とする群書類従系諸本、「うきぬ」を異文注記する菅文庫本・岩瀬文庫本、「みなはにこふる」とする甲南女子大学本、「みぎわにうかむ」とする架蔵真淵評語本写本等、異文はあるが、「水泡にまよふ」とする本はない。秀桃本の独自異文である。

秋風

秀岩　秀龍　秀桃　秀岩　三九　夕されば衣手涼・したかまどのおのへのみやの秋の初・かぜ
秀龍　三九　はつ
秀桃　三九　さむし高・砂・　を　宮・　はつ

秀桃本の初句・第二句「夕来れば衣手寒し」（校訂）は、歌意も通り、意改による独自異文であろうが、第三・四句「高砂の尾上の宮」は誤謬である。他本のごとく歌枕「高円の尾上の宮」でなければならない。なお、類従本系諸本と『新三十六人撰』[5]『後葉集』[6]は、第二句を「衣手寒し」（校訂）とし、秀桃本の本文と合致する。

秀岩　白・露　本ノマヽ（貞享版行本等詞書欠。定家所伝本系統不載。群書類従本「詞書闕」）
秀龍　□□□　□□□□（詞書ノ行一行空白）
秀桃　しら　本ノマヽ
秀岩　四〇　今よりは涼・しくなりぬ蜩・・・の鳴山陰の秋・の夕風・
秀龍　四〇　・　也・　・・・　啼　にあき　かぜ　イ夕
秀桃　四〇　すゞ　うつせみ　・　初風・

詞書の空白は先に検討した。貞享版行本等柳営亜槐本系統に始まるものである。秀桃本の「空蟬の鳴く」（校訂）

はあり得ない事柄であり、掛け詞の修辞から見ても他本の「ひぐらし」が妥当である。「蜩」を誤読したと見える。末句は、「初風」でも意は通るが、初二句「今よりは涼しくなりぬ」と意味内容が重複するとは言える。

秀岩　海邊ちどりといふことを人〳〵にあまたつかふまつらせし次に
秀龍
秀桃
秀岩　九六　よを寒み浦・の松・風吹・すさびむしあけの波にちどり鳴・也
秀龍　九七　てふ・　々・　よませ侍り・・・・・・　明・
秀桃　九七　うら　まつ　吹・すさむふき上・　千　なく

第三句「松風吹きすさむ」（校訂）を諸本・諸系統が「吹きすさび」とし、類従本が「吹きむすぶ」とするのは、歌意に大異はなく、松風が強く吹き、千鳥が鳴くよ、と聴覚イメイジを連ねる歌となっているが、秀桃本は、松風が強く吹く吹上の浜にと、「吹きすさむ」は序詞的に歌枕「吹上」を修飾することになっている。第四句「吹上の波に」は、「吹きすさむ」を序詞的に取れば妥当と言えなくもなく、千鳥が詠み込まれることが多い点でも、不適切な本文ではないが、第二句の「松風」「松」と共に詠まれるのは備前の虫明瀬戸である。因みに、「吹上の波に」とする伝本は、他系統諸伝本にも見られない。秀桃本の誤解が原因の本文変化と見てよかろう。

秀岩　（歳暮）（一一二番詞書）
秀龍　（　）（一一三番詞書）
秀桃　（　）（一一三番詞書）
秀岩　一一三　しら雪のふるの山なる杉村・のすぐる・程・なき年・のくれ哉・
秀龍　一一四　・　・ほど　・　かな
秀桃　一一四　むら　いつくか　本ノマヽ・　とし　暮・　・

秀桃本第四句「いつくか程なき」は歌意が通らず、「本ノマヽ」という注記も頷ける。秀逸本系統の前後に位置する歌に目移りを犯すような語句は見られず、「す」を「いつ」と誤り、「る」を「可」の略体「か」と誤った、

秀桃本における全くの誤写としか考えられない。

秀岩　（二所へ参・りたりし還向に春・雨・のいたくふり・しかば）（一六一番詞書）
秀龍　（　・　・　・　ふれり　）（一六〇番詞書）
秀桃　（　まい　はるさめ　・　）（一六〇番詞書）
秀岩一六二　春雨はいたくなふりそ旅人の道行衣・ぬれもこそすれ
秀龍一六一　・　社・
秀桃一六一　・降・　道行袖の

秀桃本第二句「甚く・降りそ」（校訂）は音数律が整わず、また、禁止の意の字句表現としても不十分である。他二本や他系統の「甚くな降りそ」（校訂）とあって初めて、歌意も通り、音数律も整う。秀桃本の誤謬であると言ってよい。「道行袖の」は、音数律は合うが、歌の伝統的字句表現に合わない。「袖の」は誤謬である。

他にも、秀桃本の独自異文が散見する。それも、意改と見える異文もあるが、誤謬と言ってよいものが多い。最後に、この秀桃本における誤った宛て漢字の例を掲げておく。

秀桃一〇六　巻もくのひばらのあらしさえ〳〵てゆつきが岡に雪ふりにけり（「岳」ガ是）
秀桃一八一　きみが代は猶しも尽じすみよしの松は百たび老かはるとも（「生ひ」ガ是）
秀桃一九〇　何國て世をばつくさむ菅はらやふしみのさとはあれぬと云物を（「いづくにて」ガ是）

秀桃本は、前節で指摘した通り、秀逸本系統の他二本には載る一三三番歌を欠いている。本節で見たようにこの本には誤謬が多いことからすると、その一三三番歌の欠脱も、故意の省略ではなくて不注意による誤脱と判断してよいと思われる。この秀桃本は、真淵が関わった文献や抜粋文献を拾遺した『叫芳亭叢書』という叢書の中に合綴された一点という点で貴重ではあるが、その本文は、そのままでは従えない、ということになる。

秀逸本系統三伝本の独自異文やその内の二伝本に共通する異文を殊更に指摘した。この系統の三伝本の本文の性格を明かにすると共に、今後出現するやも知れない伝本の位置付けの尺度としたいと考えるからである。

〈五〉

最後に、秀逸本系統諸伝本の巻頭に載る「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」（校訂）の本文について触れておく。この真淵の文については、『校本賀茂真淵全集　思想篇　上』[7]に検討があるが、稿者も、その本文についていずれ調査報告を試みる所存であり、ここでは秀逸本系統の「記せる詞」について簡略に述べるに止める。

この真淵の文は、筆写して柳営亜槐本系統の真淵評語書入貞享四年版行本に綴じられる場合もあれば、全巻書写本として真淵評語本系列写本の巻頭に添付されるものもある。『金槐和歌集』諸系統の中では、大分県立図書館蔵『碩田叢史』所収『金槐和歌集佳調抜』にも載る。[8]『金槐和歌集』とは別個に、単独で書写されることもある。また、『賀茂翁家集』巻之三に収められてもおり、その『賀茂翁家集』は写本としても版行本としても世に流布している。それらを子細に比較すると、本文にかなりの相違があり、この「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」そのものの本文の比較検討が必要である。それに、この文は、『金槐和歌集』に評語を書入れたその際に真淵が執筆したものなのか、それとも、先に執筆してあったこの文を後に『金槐和歌集』に評語を付す際に真淵が巻頭に添えたのか、はたまた別人がこの文と『金槐和歌集』を併せたのか、それすらも判然としない。成立の点でも本文の点でも、今後の検討が待たれる文なのである。

ここでは、紙幅の都合で、秀龍本所収本文について、同じ宝暦十年五月記とする静嘉堂文庫蔵真淵書入版行本合綴本文、宝暦五年三月記とする架蔵真淵評語本系列写本所収本文、年記を記さない文化三年版行本『賀茂翁家集』所収本文の四種を、冒頭および末尾に限って比較し、その本文の異同の一端を例示し、秀逸本系統に載るこの文の本文の位置について概観するにとどめておきたい。

以下、四種の本文を掲げ、ほぼ同文関係にある本文に同種の傍線を施し、四者の近似関係を粗々指摘してみる。

秀逸本系統　秀龍本　鎌倉右大臣の哥をみてしるせる詞　（句読点・濁点、稿者）

いはまくもかしこき上つ代のすべらぎの大御國きこしめし、にハ、こと、ある時は、大御手に弓とりしばり、大御背びらに靫かき負して、雄々しく厳き道をもて、ちハやぶる人をまつろへたまひ、やすらけきをりハ、あめつちのまに〳〵、強ず教ず、見なほし、きゝなほし、をさめおハしませば、あめの益人、おのがじゝ心なほくて、あめのごと、すめらぎをたふとむがまに〳〵、わが世をすらも、地の如平らかになん経にける。しかるを、つぎねふ山背の国へ大都を移しましてよりこなた、國地やふさハしからざりけん、厳き道や行ひ給ハざりけん、その三代四代といふ大御時ゆ、かしこきすめらぎの大まつろへごと、大おミたちのまに〳〵なりにたれバ、あを人くさの心もひたぶるならず、かれにまひし、これにねぢけて、ますら武男の鹿魂をも失ひ、うつ鹿ををミなのごとくにして、うへにハたはやぎ、したにハ邪すこと、なんなりにける。此こゝろをしるべきものは、史にしありといへども、ふミハ、なほ凡のことをしるたよりにして、よくおもひしらる、ことずちなし。たゞそのをり〳〵の世人のおもふことをいひ出にたる歌ばかり心しるきハあらざりけり。かれ、その代々によめるうたの心詞をつら〳〵ミるに、あをによし奈良の宮の大御時までハいにしへの手ぶりをつたへて、あらし男ハをとこさびして、をゝしくなほく、たをやめハをミなさびして、とをミやさしくなんありける。ちバのかずぬの宮ゆ、こなたハをとこをみなの手ぶりもわかず、すがたとをミにとをみ、こゝろたくみにたくみにして、おほ野らや秋風わたる葛の葉のうらうへあることなん、おほくなりにたり。しかありてよりハ、ミづがきの古き歌ハあれど、よし野よくミてよしとさだむる人しなければ、うつゆふの心せばく、しづたまきいやしくのミなんなりにける。こゝに、あづまなるかまくら山に、こたる木のふりにし大御代なす、雄々しく厳き手ぶりをもて、大政申給ふ時に及びて、此おほまうちぎミのよみて給ひし歌をミれば、あまぎらふ五百重の雲をいかづちなすふミ、あかち峯とほミ、千里のうらを鷹のごととびかけりて、いにしへにかへり給ひにたり。こをおもふに、此きみ、ひさに天の下を申したまはましかバ、大御代はいにしへにかへりなんものを。さきくおハせざりし社くちをしけれ。しかはあれど、こをいにしへびとのうたに

むかへて、よくミんひとは、かけまくもたふときあきつかみ、わが大きみの治ましゝ道の心をおもひえて、古の手ぶりをたふとまざらめや、ほりせざらめや。

（「附ていふ」以下、三項目、中略）

○万葉を後のひとのよみ誤れるまゝに用ゐられしもあり、此公、いにしへのこゝろハ得給へど、古語を知ひとなき世なるゆへに、誤られしならん。又、かなのいにしへに違へるも、八百年ばかりのころより、やゝあやまりて、終にあらぬこゝなれるを、改る人なきよなれば、したがひて、誤られけんかし。されど、かくやんごとなき人は、さる中までつとむるものならず、侍らふ人に其人なかりし社くちをしけれ。寶暦十年五月、心しりのぬしたちの為に、賀茂真淵がしるせる也。ゆめ、大かたのひとにハミすまじきものなり。

真淵評語書入版行本　静嘉堂文庫蔵『金槐和歌集』　巻頭合綴　（［］内ハ、行間細字書入・校合等）

［見］［しるせる詞］

鎌倉の右大臣の家集をよみて書る　賀茂真淵

［いにしへよりうつろひ来にし昔のありさまを見るべきものは、哥なり、いにしへの］

［る時は］　［ば］

かけまくもかしこきかも上つ代の天皇はことともあれは、大御手に弓とりしほり大御そびらにゆぎかき負して

［ィゆのちハしひずをしへず見なほしきゝなほし

厳くをゝしき御いづをもて、ちはやぶるあらぶる人をまつろへ給ひ、をさめましゝがゆゑ、その御いつにな

たまひつつ［てィ］天地のまに〳〵をさめましゝかば（故ィ）、人ぐさは］　［も平らかにふれは且］

らへる臣たち、天のことなかくて天皇をたうとミ、つちのこと平らかにわか世をもへつゝ、おの〳〵をゝし

［そ］［たりける］

く直きこゝろをもてなむ仕まつりにき、そのゝち、ことさへて、國のふミを傳来てより、飛鳥岡本の宮の御代となりにてハ、かの國ぶりもてさためまくし給ひしより、やゝ改て、はしきに過てかしこきいにしへのみ

［しかあれば］
ちはわすれゆくめりし、されど、民の心には、傳ハれる古のごと、残らずしもあらず、青によし奈良の宮の
［よめる哥もいにしへのこゝろをつたへてますらをハ］　［猶］［つよ
御ときまでは、あらくをハをとこさびして、を、しく、ひろく、たをやめハをミナサびして、なほくやさし
［たけ］　［のかたちハさすがに］［するも
き心をうしなはす　まして］
のながら］
き哥をなむよみたりける、後の大宮處となりにては、國津都やふさハしからざりけむ、いがき道をしおこな
［上を］
ハせたまはざりけれバ、ます人のとも上を、ひたぶるにかしこミたらす、かれにまひし、これにねぢけて、
［たけをの　もィ　けるより］
ますらをハを、しき、あらたまをうしなひ、をミなは、うましにぎたまもあらずなりにしより、八束ひげお
［に似たらむことをおもひ、をみなはいよ、たわやぎつ、、うハべ
花やかに、下の心はかだましくなむなり来にける、かくて］
［ひ］たる男も、ぬえくさのをミなもわかず、たをミにたをミたる哥をぞいひたる、かくて、
（中略）
萬葉を後に讀あやまれるま、にとられしも、又あり、いにしへのこゝろハ得られにたれど、その頃、古こと
を知たるひとしなければ、えたゞしあへざりけるま、也、仮字にも、いにしへにたがへることあるは、正す
人なきよのま、也、しかはあれど、かゝるやんごとなき人ハ、さる事を［つぶさに］つとむるものにあらず、
さむらふ人にそのひとなかりけるこそをし［かり］けれ、
寶暦十年五月　　かもの真淵しるす（コノ一行、本文別筆）

真淵評語本系列写本　犬井架蔵『金槐和歌集』巻頭書写　（題ナシ）

かけまくもかしこき上つよのすめらミこと、ことしあれば、大御手に弓とりしばり、おほみそびらにゆぎかきおはして、厳くを、しき御いづもて、ちはやぶるあらぶる人をまつろへ給ひ、をさめまし、ゆゑ、そのミいつにならへる民ハ、天ながく、□□□□□（行末空白）□□□□□□□□□□□□□すめらミことをたうとミ、つつちたいらけく、我世を経つゝ、おの〱おほしく直きこゝろもてなむつかへまつりき、その後、ことさへく、国のふミを傳へきてゆ、飛鳥河原のミやの御時らにいたりてハ、かのくにぶりのことさきことわりにつけて、定めましく玉ひしまゝに、大まつへことくはしきにすぎて、此きこしをす、くにちにたがひ、かミつよの道ハわすれまくめりし、しかハあれども、民のこゝろにハ、傳はれるいにしへのことの、のこらずしもあらず、青によしならの宮の御時ゆまでハ、しもあらしをバ男さまして、を、しく高く、たをやめハをな子さまして、直くやさしきうたをなんよミたりける、かくてのちのミやことなりてハ、くにつちやふさハしからざりけむ、厳き道を行ハせまさゞりければ、まあ人のとも上を、ひたぶるにかしこミたらず、かれにまひし、これにねぢけて、ますらをのあら魂をうしなひ、うつそを、ミなかどもハ、うましにぎにたまもあらずなりにつゝハ、束髭おひたるをとこも、ぬえ草のをミなもわかず、たをミにたをミたるうたをなむ、よしとおもへりける、

（中略）

萬葉を後に讃誤かしまゝにとられしも有、いにしへの心をバ得給へれど、時にさることわび□むる人なかりつる比なり、假字もいにしへに違へる有ハ、はたさる事正す世ならねバなり、かくおもきあたりにはつばらかにつとめ玉ふものにあらず、さむらふ人にそのひとなかりけるこそをしけれ、

寶暦五のとしやよひに賀茂真淵誌ぬ

『賀茂翁家集』[9]　文化三年版行本　所収　『鎌倉右大臣家集のはじめにしるせる詞』（筑波大学附属図書館蔵本）

いにしへよりうつろひ来にし世々のありさまを見るべきものは哥なり、いにしへの天皇、こと、ある時は、

大御手に弓とりしばり、大御そびらにゆぎかきおばして、いかくを〻しき御いづをもて、ちはやぶる人をまつろへたまひ、しひずをしへず、見なほし、き〻なほしたまひつ〻、天地のまに〳〵をさめまし〻かば、人ぐさは、天のごと天皇をたふとみ、つちのごとわが世々をたひらかにふれば、おの〳〵を〻しくなほき心をぞもたりける、しかあれば、青によし奈良の宮までは、よめる哥も、いにしへの心をつたへて、ますらをはをとこさびしてを〻しくたけく、たをやめはさすがにをみなさびするものから、猶なほくつよき心をうしなはずなんありける、そが、後の大みや所となりにては、くにつちやふさはしからざりけむ、いかきみちをしおこなはせたまはざりければ、ます人のとも、ひたぶるに上をかしこみたらず、かれにまひし、これにねぢけて、ますらたけをのあらたまをうしなひけるより、やつかひげおひたるをとこも、ぬえくさのをみなに似たらんことをおもひ、をみなはいよ〻たわやぎつ〻、うはべ花やかに下の心はかだましくなんなり来にける、かくて世の中くだちにくだち、おとろへにおとろへては、人のこ〻ろもよめる哥も、たにぐ〻のさわ（た）るがせばく、うつゆふのこもれるがいぶせき如くにして、打きくにもくるしくなんなり来にける、

（以下、中略）

そのいつ〻

万葉を後に讀誤れるま〻にとりたまへるも、はた有、古の心は得られにたれど、其比古言を知りたる人しなければ、え正しあへざりけるま〻也、假字も古にたがへる事あるは、たゞす人なき世のま〻也、しかはあれど、か〻るやむごとなき人は、さることをつぶさにつとむるものにあらず、さぶらふ人に其人なかりけるこそをしかりけれ、

秀逸本系統の秀龍本と秀岩本・秀桃本の「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」の本文とは、例示は省略に従うが、殆ど同文である。その秀逸本系統の「記せる詞」の本文は、静嘉堂文庫本『鎌倉右大臣家集』真淵評語書入版行本に綴られた「記せる詞」の本文に近いが、その静嘉堂文庫本『鎌倉右大臣家集』真淵評語書入版行本に綴られた「記せる詞」に行間書入れや異文注記が多数見られるとおり、この「記せる詞」は本文変化がかなり生じてい

るのである。それが、また、『賀茂翁家集』に収められた本文とも相違が大きい、というわけである。秀逸本系統に載る宝暦十年記の「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」は、宝暦五年記のこの文の本文とも、真淵評語書入版行本に付された本文とも、また、『賀茂翁家集』に収められた本文とも、いささか異なり、増補されたところが多い、ということができる。

末尾の部分は、本文に大筋において差異がないにも関わらず、細部においてはかなり差異がある。特に、秀逸本系統所載本文に「寶暦十年五月、心しりのぬしたちの為に、賀茂真淵がしるせる也。ゆめ、大かたのひとにハミすまじきものなり」などとあるのは、大幅な改変といえる。

この「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」について、斎藤茂吉著『源実朝』[10]に、次のような発言がある。

多くの書入本はこの真淵の文を附載してゐる。この文に約二種あつて、宝暦五年三月記といふのと、宝暦十年五月記といふのとある。それゆゑ少くとも真淵自身の書いたものに二種あり、或はもう少し多いのではあるまいかとおもはれるふしがある。真淵が人の依頼によつて書入をしてゐるあひだに詞語が少しづつ変化することもあり得るからである。それからその真淵の書入がつぎつぎに写されたが、そのあひだに少しづつ変化してゐるのがある。ある本に、真淵の言葉として、『宝暦十年五月心しりのぬしたちの為に加茂真淵がしるせるなり。ゆめ大かたの人には見すまじきものなり』などといふのもあつて、普通、『宝暦十年五月加茂真淵しるす』とあるのと違ふ。これも後人筆写のあひだに恣に変へたものとも思つたことがあるが、其後注意すると、神宮皇学館本も、山岡本も共に同様のがあるから、やはり真淵の書いた一種と考へねばなるまい。

稿者の検討は、多くの資料について全文を比校し了えたわけでないため、断言はできないが、概ねこの茂吉の発言が確認できている。また、河野頼人氏が[11]、広島大学文学部蔵『金槐和歌集』（稿者は未見であるが、柳営亜槐本系統真淵評語書入版行本であるようである）[12]の巻頭に載るこの真淵の序言（当該本にはこの文章に題がなく、河野氏は「序言」と呼ばれる）について検討され、その全文を翻刻された際に、次のように述べておられる。因

みに、広島大学文学部蔵版行本に付された序言の本文は、氏の引用に拠れば、「宝暦五のとしやよひに賀茂真淵しるしぬ」と結ぶ、小異はあるが、本稿に見た真淵評語本系列犬井架蔵本の「記せる詞」と同じ本文である。

秦親盛の識語を手がかりに、広島大学本の金槐集の序言は真淵の自筆とみてよいのではないかということ、又その序言を初稿ないしは初稿に近いものとみてよいのではなかろうかと述べてきたのである。

この「記せる詞」には、犬井架蔵本に見たように宝暦五年三月記のものと、静嘉堂本に見たように宝暦十年五月記のものとがあり、その間に本文の相違が見られる。それぞれにほぼ同文が諸伝本に載るが、全く同文というわけではなく、書写性の本文変化が認められる。秀逸本系統に載る文のごとく、「寶暦十年五月、心識りの主たちの為に、賀茂真淵が記せる也。ゆめ、大かたの人には見すまじきものなり」（校訂）とあるものを、茂吉は、最初、真淵の言葉とは見なかったようであるが、他にも同文の載る伝本が存在する事実から、これも真淵の文の変形であるかも知れないと考えるようになったようである。尤も、稿者は、この「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」そのものは元々真淵の手になるとは考えるが、前述の通り、現在残る資料が、『賀茂翁家集』所収のものを含めて、真淵の執筆のままであるとは確信するまでに至っておらず、まして、本稿で取り上げた『金槐和歌集』の真淵評語書入本の為に執筆されたのか、別に執筆しておいたものを真淵が合せたのか、はたまた、別人が、「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」と真淵評語書入本系の『金槐和歌集』版本あるいは写本に合綴したか、判然としないと考える。尤も、河野氏が、広島大学本の稲荷社秦親盛の奥書から、真淵が人への「土産」とすべく幾度も『金槐和歌集』版行本に評語書入を試みた、とされた見方については、その可能性を認めるものではあるが。

〈六〉

秀逸本系統『金槐和歌集』三伝本の調査からする、この系統の本文についての報告を整理しておきたい。

『金槐和歌集』の秀逸本系統の本文は、柳営亜槐本系統の内の真淵評語書入貞享四年版行本もしくはそれを書写した真淵評語本系列の本から、歌を一九八首抜粋したものである。真淵は評語を書入れた本に合点を施しており、秀逸本系統に抜かれた歌の多くは、その合点の付された歌である。

この系統の伝本は、三本管見に入っているが、その内、龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本の『鎌倉右大臣集』（巻首題『金槐歌集秀逸』。秀龍本）が、所載歌に脱落がなく、歌順にも乱れのない本である。本文が三個所にわたり空白になっているが、これを他伝本によって補填し、ごく少々見られる誤写を修正することで、秀逸本系統の信頼できる本文を復元することができる。

岩瀬文庫蔵『金槐和哥集』（巻首題も同。秀岩本）は、二首、歌の位置が乱れているが、これは、各部の書写を了えた際に本文を点検して誤脱に気付いた書写者が、直ちにその部の末尾にその欠脱歌を補ったという、慎重な書写態度を示すものであり、本文に誤写・誤解が少ないという事実を併せ考えると、龍谷大学大宮図書館蔵写字台文庫本（秀龍本）の空白や誤写を補正するための最有力な伝本であると言える。

東海大学付属図書館蔵桃園文庫本『叫芳亭叢書』所収『鎌倉右大臣集秀逸』（巻首題『金槐和歌集秀逸』。秀桃本）は、真淵の家集の抜粋本等との合綴であり、その点では貴重な伝本である。ただ、歌が一首脱落しており、また、所載歌の本文に独自異文が多い。それも、意改と共に誤謬と見ざるを得ない異文が散見する。岩瀬文庫本の次位に置いて、写字台文庫本（秀龍本）の空白や独自異文を修正する資料とすべき伝本である。

秀逸本系統の和歌本文と、秀逸本系統三伝本の和歌本文との本文の吟味の結果、以上のごとき結論を得た。この秀逸本系統『金槐和歌集』を実朝歌の批評や真淵の歌観の検討に参加させるには、かような手続きを経て本文を確定した後に行なう必要があると言える。

なお、三本共に抜粋済みの写本を写した本のようではあるが、どの本が、あるいはどのような本文が、真淵評語書入本の系列から直接歌を抜いたのか、という問題は、決着が付かず、検討の必要がある。

また、巻頭に添えられた真淵の「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」については、本文の検討が必要であり、今

後に俟ちたい。秀逸本系統に添えられた「記せる詞」は、宝暦十年五月真淵記のものであるが、同じ宝暦十年五月真淵記である静嘉堂文庫蔵真淵評語書入貞享四年版行本添綴の本文とはかなり異なる。また、架蔵真淵評語本系列写本に載る宝暦五年三月真淵記の「記せる詞」とも本文は異なるところが多い。また、『賀茂翁家集』巻之三「雑文一」に収められた「記せる詞」は諸本の間に小異があるが、秀逸本系統所載の「記せる詞」とは大異がある。それに、この「鎌倉右大臣の歌を見て記せる詞」は、秀逸本系統の巻頭に置くために執筆されたものであるのか、別に執筆されたものを真淵が秀逸本系統の抜粋本と併せたのか、はたまた、別人が「記せる詞」と『金槐和歌集秀逸』とを併せたのか、そのあたりの問題も、今後の検討課題である。

成立に関しては多くの問題を残す本稿であるが、秀逸本系統『金槐和歌集』と真淵評語本系『金槐和歌集』との本文の関係と、秀逸本系統の管見に入った三本の本文の書写上の性格だけは、かなりの程度、明かにできた。只の三伝本が伝わるのみであるとはいえ、秀逸本系統という異種本の著作性本文形成とそこからの書写性本文変化とがあった事実は、『金槐和歌集』の本文流伝を辿る上で、看過なしえぬ事柄であることだけは間違いない。

（注）

1、「異種本」「書写性本文変化」「著作性本文形成」の用語の定義については、拙稿「『平家物語』の成立基盤――その書承的側面――」（『平家物語の成立』平成五年十一月）をご参照ありたい。

2、「『金槐和歌集』伝本分類私考」（『筑波大学平家部会論集』十・平成十六年一月）。その稿発表の直後、

＊津市図書館蔵　橋本文庫本（定家所伝本系統　群書類従本系列）

＊お茶の水図書館蔵　成簣堂文庫本（柳営亜槐本系統　真淵評語本系列）

を拝見する機会を得、また、

＊阪本龍門文庫蔵本　（柳営亜槐本系統　真淵評語本系列。龍門文庫蔵書目録）

＊阪本龍門文庫蔵本　（澤近嶺自筆書入本。龍門文庫蔵書目録）

＊石川県立図書館蔵　饒石文庫本（群書類従本抜粋。国文学研究資料館　古典籍総合目録データベース）

＊福光町立図書館蔵　徳能文文庫本（柳営亜槐本系統。国文学研究資料館　日本古典資料調査データベース）
＊尾鷲市立中央公民館郷土室蔵本（柳営亜槐本系統。国文学研究資料館　日本古典資料調査データベース）

の存在を知った。いずれ、それぞれの伝本の位置付けに関して補遺の報告を行なう所存である。

3、「抜粋諸系統『金槐和歌集』歌番号対照表――柳営亜槐本系統賀茂真淵評語本との比較――」（「筑波大学平家部会論集」七・平成十一年三月）。その稿では、秀龍本は未調査で、対照表に掲出していない。

4、勅撰集の引用は、『新編国歌大観』所収による。

5、『新三十六人撰』の本文は、『新編国歌大観』所収による。

6、『後葉集』の本文は、『図書寮叢刊　後葉和歌集』（底本、谷森本。昭和五十一年三月）による。

7、山本饒氏編、昭和十七年十二月刊。

8、「大分県立図書館蔵「碩田叢史」所収『金槐和歌集佳調抜』の本文について」（「筑波大学平家部会論集」八・平成十二年十二月）

9、筑波大学附属図書館蔵本（ル二一六―三六）による。『賀茂真淵全集』第二一巻（昭和五十七年八月刊）所収（底本、文化三年版行本）を参照した。

10、斎藤茂吉著『源実朝』（昭和十八年十一月刊）

11、「広島大学文学部蔵金槐和歌集の賀茂真淵の序言――秦親盛の識語をめぐる一考察――」（伏見稲荷大社社務所刊「朱」・一四・昭和四十七年十一月）

12、『瀬戸内国文写本文献目録』（昭和四十年七月刊）の「広島大学文学部」の項に「鎌倉右大臣家集　半　一」とあるのは、「写本のみを取りあげ」（まえがき）た同目録の主旨から見て、別の伝本であろう。

〈付　言〉

本稿は稿者担当の比較文化学類平成十五年度講義「日本文学演習Ⅲ」の成果の一部であり、平成十六年二月十九日の授業時に、稿者自身が演習発表者として、この粗々を口頭発表した。同講義の受講生諸君の発言や質問に示唆を得て本稿で敷衍・検討したところがある。記して謝意を表すものである。

本稿をなすに当り、ご収蔵書の閲覧や写真複製等の頒布をご許可下さった東海大学付属図書館・西尾市岩瀬文庫・龍谷大学大宮図書館その他の公私の文庫・図書館・大学附属図書館、ならびに、閲覧に際し種々ご教示とお力添えを賜った担当者諸氏に、あつく御礼申しあげる。